

# 飛騨農林事務所の普及活動状況（飛騨版）

令和2年7月25日現在

## 今月の重点活動

### ■ほうれんそう ラジコン草刈機講習会【スマート農業加速化実証事業】

6月26日に、国のスマート農業加速化実証プロジェクトにおいて導入した、ラジコン草刈機の安全講習会を関係農家及び関係機関を参集して実施した。

飛騨地域を含む中山間地域は法面の傾斜が大きく、一般的な草刈機で畦畔管理を行う場合、身体的負担が非常に大きいとともに、転倒等の危険も伴う。

今回実証を行ったラジコン草刈機は45度までの傾斜で使用でき、離れた場所から操作することができるため、傾斜地に立つ必要がなく、作業者の負担軽減が期待される。

当日も、傾斜40度程度の濡れた斜面で実際に草刈作業を行ったが、問題なく作業ができた。ほうれんそう経営ではあっても、ハウス周囲の草刈りや農地の維持管理は必要であり、草刈の省力化によって生じた時間等を、栽培管理に向けることが期待できる。

農業普及課は、事業の進行管理役として実証調査に協力し、スマート農業技術のほうれんそう経営への導入可能性について検証していく。



【使用方法の説明を受ける生産者】

## 多様な担い手づくり

### ■担い手 岐阜県で就農したい！～短期研修を受入～

岐阜県で就農意向のある愛知県の夫婦が、7月7、8日に高山市で短期研修を受講した。これは、市内の農業や農村生活を、農業者との交流、農業体験を通して体感し、市内での就農イメージを描いてもらう事により就農移住につなげ、人口増加及び農業の発展に寄与することを目的としている。

当日は、トマト新規就農者、長期研修生、トマト農家等の視察やトマトの誘引作業も体験し、移住後の農業経営や農家生活を考える足掛かりとなった。

農業普及課では、関係機関と連携しながら就農希望者の面談から研修、就農後の経営安定まで、今後も継続して支援していく。



【誘引作業のコツを聞く夫婦】

### ■担い手 青年等就農計画審査会を実施（高山市）～認定新規就農者の認定～

高山市就農支援会議では7月16日に、青年等就農計画の認定審査会を実施した。

今回の対象者は、飛騨地域初となるワイン用ブドウ生産を計画している。これまでに、栽培技術に加えて、ワイン醸造技術・経営知識を習得するため、毎週長野県内の民間の研修機関に通い、所定の研修過程を終了した。

審査会では、収穫したブドウでワインを醸造し、飛騨産ワインを地域の新たな特産品とする将来の農業構想について、熱く説明がなされた。

農業普及課では、自主性を尊重した就農計画の作成について支援を行ってきたが、新規就農者が経営開始後早期に栽培技術、経営管理能力を習得できるように継続して支援を行っていく。



【将来の農業構想を熱く説明】

## ■夏秋トマト 若手農業者の視察研修

7月13日に、高山南地域の野菜出荷組合青年部の視察研修会が開催され、トマト、ほうれんそうの若手生産者が高山市の東農園を訪問した。東農園では、パプリカとほうれんそうなどの複数品目を栽培しており、説明後、参加者からはパプリカの管理作業や労働時間など経営面も含めた質問があり、同世代の若手農業者の視点、経営向上の取組みについて活発に意見が交わされた。

高山南地域では経営安定化に向け、複数品目を栽培するトマト生産者が増加していることから、農業普及課ではJA営農指導員と協力して技術情報提供などの支援を継続する予定である。



【意見を交わす生産者】

## 売れるブランドづくり

### ■水稲 全員マスク着用で水稲青空教室開催

6月下旬～7月中旬にかけて、飛騨地域各地で水稲青空教室が開催され、普及指導員とJA営農指導員等が講師として、指導を行った。

今年は、新型コロナウイルスの影響から、中止も検討されたが、ほとんどの地域で例年どおり開催された。参加者には、マスクの配布や手の消毒等の対策も講じた。

飛騨地域では6年前から米コンクールを開催しており、この時期は、けい酸加里や穂肥等食味に大きく影響する作業が多いため、参加者からの質問も多数あった。

農業普及課は、適期収穫や米コンクールの出品支援等引き続き支援していく。



【マスク着用で青空教室】

### ■水稲 稲作農家の大敵「難防除雑草」に効く新規除草剤の現地試験

飛騨地域の水稲生産では、近年難防除雑草と言われる「オモダカ」や「クログワイ」が問題になりつつある。これらは、土の中にある塊茎（いものような種）から芽を出し、水田に繁茂するため、最初の除草剤では防除しきれず、雑草が大きくなった後では後期除草剤が効きにくいという難点がある。

稲刈り後にはまた塊茎が増殖し、年々雑草の数が増え、お米の収量・品質を下げる原因となり、水稲農家の経営悪化を招く。そこで農業普及課では、JA営農指導員と協力して、難防除雑草にも効果が見込まれる新規除草剤の現地試験を行い、その効果を検証し、農家への普及を目指している。

今後も有効な農薬の実証や説明会を通して、効果的な農薬の使い方に関する指導を行い、生産者を支援していく。



【営農指導員と実証試験を実施】



## ■水稲 奥飛驒娘生産組合が現地研修会と開催

高山市国府町内と飛驒市古川町内の特別栽培米生産者で構成される奥飛驒娘生産組合は、7月22日に現地研修会を開催した。現地視察として、国府町内と古川町内のほ場を見学し耕作者から管理方法の説明を受けるとともに今年の生育状況を確認した。

その後、JAひだ吉城営農センターで行われた室内研修で、農業普及課から今後の管理について指導した。同日に斑点米カメムシ類とイネいもち病の病虫害発生予察注意報が発表されたこともあり、病虫害防除を徹底するよう呼びかけた。今後も天候の動向を注視し、良質な特別栽培米の生産に向けて支援を継続していく。



【ほ場で生育状況を確認】

## ■とうもろこし 吉城とうもろこし目揃え会を開催

吉城地区の生産者からなる吉城蔬菜出荷組合とうもろこし部会が、収穫、出荷の本格化を前にした7月22日に目揃え会を開催した。

出席した生産者たちは、JAの担当者とともに収穫の方法や出荷規格を改めて確認し、これから本格化する収穫に備えて認識の統一を図った。

農業普及課からは、品質の良い実を採るための適切な収穫時期の見極め方や、鮮度を保つための収穫作業の方法について説明した。農業普及課では、生産者が今後も高品質なとうもろこしを生産できるように支援を行っていく。



【目揃え会に出席した生産者たち】

## ■夏秋トマト 土壌溶液の採取・分析で肥培管理の安定化をめざす

農業普及課では、JAひだ営農指導員と連携協力し、丹生川トマト部会の部会員に定期的な土壌溶液の自主採取を呼びかけ、週に1回の分析を実施することによって、的確な肥培管理の支援に取り組んでいる。

夏季高温期はトマトの生育が速く、併せて土壌中の肥料養分の変化も大きくなっている。肥料養分を含んだ土壌溶液を直接分析することにより、その変化を把握することができ、適切な施肥量を判断する目安となる。また、毎週100点近くの土壌溶液サンプルを分析することで、産地全体の傾向を把握することも可能となる。

部会員からは、定期的な採取及び提出の手間を要するが数値で土壌の状態を把握できることで肥培管理を判断する目安になるとの評価が得られつつある。



【土壌溶液測定の様子】

## ■夏秋トマト 大雨後の管理徹底を呼び掛け

農業普及課では、旧高山市管内の夏秋トマト生産者に対し、大雨後のトマトの栽培管理について、7月のグループ活動にて説明を行った。

特に曇雨天後のしおれ対策、湿度上昇による病虫害発生への対策、曇雨天時の追肥資材の選択について説明を行った。

今後は7月集中豪雨後の管内の状況を確認し、栽培指導を継続することにより、曇雨天及び大雨の影響を最小限に抑える支援を行う。



【大雨後の管理説明】

## ■夏秋トマト 飛騨トマト出荷スタート 各地で目揃え会開催

飛騨野菜出荷組合トマト部会では、本格的な出荷を前に出荷規格の目合わせを確実にを行うため、7月上旬以降に各地区で目揃え会が開催された。

7月1日、各地区に先立ち、高原野菜出荷組合トマト部会で目揃え会が行われ、着色や規格の確認が行われた。

農業普及課では、脇芽かき・着果処理の徹底、追肥・灌水のポイント、灰色かび病対策について情報提供した。

今後も、高単価が期待される秋季に向けて、少しでも多く出荷できるよう技術支援を行っていく。



【規格を確認する生産者達】

## ■スナップエンドウ 秋作スナップエンドウ及びモロッコインゲン栽培研修会

スナップエンドウには5月から7月にかけて収穫する春作と、10月から11月上旬にかけて収穫する秋作がある。

6月30日、丹生川野菜出荷組合特産部会において、秋作を栽培する生産者を対象とした栽培研修会がモロッコインゲン栽培研修会と合同で開催された。今年の栽培予定者数は11名と、昨年度と比較して増えており、秋作の栽培は普及しつつある状況。

農業普及課からは、栽培マニュアルに基づきほ場準備から収穫に至るまでのポイントを説明した。出席者から、施肥やかん水などの管理作業や病虫害防除について多数の質問が寄せられ、活発な意見交換が行われた。

秋作の播種は8月から行われる予定。



【説明を熱心に聞く生産者】

## ■第三品目 農薬保管庫巡回を実施

高原野菜出荷組合特産部会において、7月2日に農薬保管庫巡回が実施された。当日は高原野菜出荷組合長や特産部会長、JA営農指導員と一緒に、10戸の生産者を対象に農薬保管及び散布器具の洗浄の状況について確認を行った。いずれの生産者も鍵のかかる頑丈な保管庫に保管しており、散布器具の洗浄についても適切にされていることが確認できた。農業普及課からは、より良い農薬保管方法として、農薬保管庫内のレイアウト等（粒剤・粉剤を上段、液剤を下段）について助言した。

農業普及課では、今後も、農薬の適正使用について指導を継続していく。